



容赦なく照り付けていた太陽が、日を追う毎に弱まる中、吹き抜ける風が熱波から涼風へ移り変わっていく。長かった夏が終わり、実りの秋を迎えると同時に、冬の足跡が迫ってくる。

遠ざかる夏に寂しさを感じつつも、大きな木箱を抱えていたスペインは、通い慣れた道筋を歩いていった。そして、一軒の家の前で、器用に木箱を抱え直しながら汗を拭くと、ドアベルを鳴らした。

応答の音が扉越しに聞こえる中、次第に駆け寄ってくる足音が大きくなった。ガチャリと軽やかに開け放たれた扉から、予想通りの人物が顔を出した時、満面の笑みが零れ落ちた。

「イタちゃん、オッラ♪」

突然な訪問に一瞬だけ驚くイタリアだったが、温和な笑みのスペインに、自然と笑顔になっていく。

「チャオ、スペイン兄ちゃん、久しぶりだね♪」

躊躇もなく家に招いてくれるイタリアに、端から遠慮する気のないスペインも、いつも通り玄関を潜り抜ける。のんびりした足取りで玄関ホールを通り抜けながら、持っていた木箱を軽く傾けて中身を見せた。

「お届け物やで〜」

茶目つ気たつぷりに微笑むスペインと、木箱にぎつしりと

詰まったトマトやマスカットに、イタリアの笑みが更に輝きを増した。

「グラッツェ〜♪」

真っ直ぐにキッチンへ向かったスペインは、サイドテーブルに木箱を置くと、そのまま中身を広げ始めた。

トマトやオリーブにマスカット、早摘みのオレンジ、おまけと言いたげに、今年初のワインまで出てくる。

「今年も豊作やってん、いっぱい食べたって〜」

誇らしげに振る舞うスペインに、素直に喜ぶイタリアは、脳内で様々なレシピが飛び交っていく。

「いつもありがと〜、今日はトマトとオリーブの冷製パスタに決定だね！あ、夏野菜乗せて、ピッツァもイイかも」レシピを考えるだけでヨダレが出てきそうなイタリアに、スペインも満足そうに微笑んだ。

しかし、いつもなら一緒に騒ぎ始めるはずの片割れが、声すら聞こえてこないことが疑問になる。

背後を見渡しても姿は見え、リビングの方を軽く覗き込んだスペインは、何気ない調子で口にした。

「今日はイタちゃん1人なん？ロマは？」

名前を耳にした途端、現実を引き戻される気分だったイタリアは、僅かに硬直すると、あからさまに顔を曇らせた。そして、項垂れるように緩々と肩を落とすと、言い難そうに語尾を濁らせていく。

「え〜と、兄ちゃんは・・・」

言葉を詰まらせたまま眉を下げるイタリア人は、軽く首を傾けて話を促すスペインに、観念したように重い口を押し上げた。

「さつき、逃げられちゃって・・・」

力ない足取りに連れられて、リビングへ移動する中、テーブルの上に広げたままの書類が、嫌でも目に付く。

そこそこの量がある書類の数々に、スペインも悟ったように苦笑する。

「あゝ、なるほどなあ・・・」

納得に満ちた呟きに、嘆息を零したイタリア人は、処理済みの書類を手早く束ねていく。

「どこ行っちゃったんだろ〜」

急ぎではなくとも、貯め込めばため込むほど、書類仕事は面倒になる。

冬の準備を開始するためにも、早めに片付けたいのに、一定の仕事量を超えた辺りで、逃走されたようだ。

「今日はアドリア海がキレイだから、散歩かな？ 案外近くにおりそ〜やけど」

行動パターンを熟知しているスペインの呟きに、不意に思い出したように顔を上げたイタリアは、一縷の望みをかけられるように捲し立て始めた。

「そうだー近所に美味しいジェラートのお店が出来んだ、休憩に食べたいねって話してて、そこにいるかもー」
言い終わらない内から駆け出したイタリアは、部屋を出る

寸前、呆れ顔で見送るスペインに、困り顔のまま手を振った。

「スペイン兄ちゃん、すぐに帰ってくるから、好きに寛いで〜！」

言いたいことだけ告げて走っていくイタリアに、有無も言わずに留守番を押し付けられた気分になる。

しかし、それを軽く笑って流したスペインは、手近な書類を拾い上げると、ざっと内容を流し読みした。

似たり寄ったりの内容の書類は、どこの国も変わらない。

いつも、それらを1人で捌いている者としては、探しに行く暇があるなら、書類を片付けた方が早いように思える。

しかし、イタリアも同じように飽き飽きしているからこそ、1人で仕事するのは嫌なのだろう。

その気持ちも分かると言いたげに苦笑してから、テーブルへ書類を戻した。

そして、未処理分を大まかに分類分けだけ終わらせたスペインは、何気なく窓へ視線を向けた。

窓の外には、日差しに照らされ青く輝く海原に、目が眩みそうになる。

今日も美しく晴れ渡っているアドリア海に、薄く目を細めかけた時、窓枠の隅に見覚えのあるくるんが目に入った。

吹き出しそうになる声を必死に押し殺しながら、足音を忍ばせて歩み寄ったスペインは、次の瞬間、躊躇なく窓を大きく開け放った。